

## 内包された「淫靡」あるいは溶解する「夫婦」

——古井由吉『妻隠』をよむ——

正田雅昭

「妻隠」は一九七〇年十二月『群像』に掲載された小説である。<sup>(1)</sup>古井由吉は、「杳子」で芥川賞をとるわけだが、その際にこの「妻隠」も高い評価を得ており、こちらを賞に推した評者も少なくない。まず、注目すべきなのは、古井自身による作家言説である。

設定するというより、何かをみつめるところから始まる。見つめるといふ行為は、要するに、見つめるほうの人間も対象から影響を受けるということですね。何かを見つめる。するとその対象が逆に見つめる対象に働きかける。なぜと言って、見つめられる主体は痩せ細りますから、今度はカゼが逆流するわけです。

(傍線部は論者、以下同様)

「杳子・妻隠」を語る<sup>(2)</sup>

この「見る」行為を通じての主／客の相互浸透あるいは主客という概念そのものの「揺らぎ」といった問題系は、古井の主要なテーマといってよく、確かに「妻隠」にも同様の指摘をすることは可能である。だが、同対談における、以下の指摘には注意が必要である。

僕は男女のつながりというのは、あのつながり方を最善とします。二人だけでこもっているけれども、籠っているということが、よけいに外側の凄い力を自分のほうに引き寄せる。そういうつながり方を最善というのはおかしいけれども、こういう世の中だったら、一番自然な姿じゃないかという気があるのです。その意味でだしのない関係だとか、崩れた関係だとかを描いたつもりは全くないのです。それだけは確かです。

こう述べた古井は、「頽廃から免れたひとつの男女の関係を書いた」と確信している。以後、この夫婦の関係をあの種の「安定」と評す論者は多い。こうした文脈の延長にある論として、たとえば大谷慎一郎は「細胞液」の「循環」を「老婆のような他者の入り込む余地」がないものとしてとらえ、「平衡感覚」を、それよりも一層強固に「二人の関係をいわば再帰的に安定させようとする試み」である<sup>(3)</sup>と指摘している。

だが、であれば、なぜこれほどまでにこの夫婦は「老婆」に囚われてしまうのだろうか。古井の言説は、このテキストを夫婦関係がより強固なそれに移ってゆく話と捉える文脈の方向付けをしてしまっている様に思えてならない。論者がこの方向付けに否定的なのは、こうした作家自身による「誘導」が、このテキストに内包される、より先鋭的な批評性を覆い隠してしまうのではないかと思われるからだ。

こうした文脈において、奥野健男は、ほとんど唯一異なる読みを提示しているのが注目される。<sup>(4)</sup>

何も起こりはしない。けれど、耳に労務者たちの東北弁がよく聞こえてくる。その聴覚の中に危機が蔵されているのを見事に描いている。特に、妻が夜ゴミ捨てに行き、労務者たちから酒をふるまわれるあたり、ここにも第

三者がいなければ。愛も確かめ得ない現代の頹廢という衰弱が現れている。

ここで奇しくも「頹廢」という言葉をもって古井の言説と対応しながらも、描かれる「夫婦」の姿を必ずしも肯定的に解釈してはいない論評である。しかしながら、ここでも、「何も起こりはしない」と全ての出来事を起こらなかつたこととして見做すことには疑いを持たない。

和田勉も奥野と同様に、「妻隠」で描かれる姿を「時代の病」と捉えながらも、「老婆やヒロシは夫婦が部屋に籠もる中でうみだした妄想」であると捉えている。物語全体の印象としては、森川達也の「若い独身の労働者たちの寮に近く住んでいる夫婦の不安定なような、それでいて安定しているような濃密な心情を捉えた」という評が的を射ているのかもしれない。

物語は、四人の人物の交錯によって織りなされる。寿夫、礼子、老婆、ヒロシ。大学時代の同棲からそのまま結婚した夫婦である寿夫と礼子。中学を出て上京したばかりのヒロシ。夫婦よりかなり年のいった老婆。四人はジェンダーと年齢の面で夫婦を中心に対称性がある。さらに、夫婦である寿夫、礼子に対して、ヒロシと老婆は（後者に関して）は少なくともテクスト内では）ともに独り身である。礼子とヒロシは同郷であり、老婆と寿夫はともに来歴は不明であることによって相同性がある。寿夫、礼子、ヒロシは、それぞれの形で老婆に「勧誘」されている状況を共有しているし、玲子とヒロシはともに病気の寿夫を助けている。

結論を先取りすれば、こうした構造化によって成り立つテクストの主題は、確かに主客の反転あるいは主体の「揺らぎ」（あるいは不確実性）であろう。しかし、時代性を取り込んで読もうとすればするほど、描かれている事物のリアリティは強まってゆく一方、自己あるいは夫婦の輪郭には「揺らぎ」が生じ、物語の様相は渾沌を深めてゆく。

このテキストの世界は、現実／非現実の識別が曖昧であることを結論としているのではない。むしろ、その「揺らぎ」を前提として成り立っている世界なのだ。そこで描かれるのは、「夫」「妻」「夫婦」といった関係あるいはシステムの脆弱さこそが本質であるという事態だのではないだろうか。

本論は、後発の作家たちに付されることになるマジックリアリズムと言われる手法を先取りしたかの様なこのテキストを、時代性と人物関係を中心に考察し、物語の中で最も重要なキータムとなる「淫靡」という問題について考えてみようとするものである。

## 1 寿夫と老婆

それでも夏の盛りともなれば、自然はいかに包囲されていてもやはり自然だけあって、ことさらに旺盛に、ことさらに淫ら<sup>①</sup>がましく生い繁つて、すぐ目と鼻の先の新興住宅地の眺めをすっかり覆い隠してしまい、アパートの側からは、一見、すこしばかり奥行きのある林に見えた。

(172)

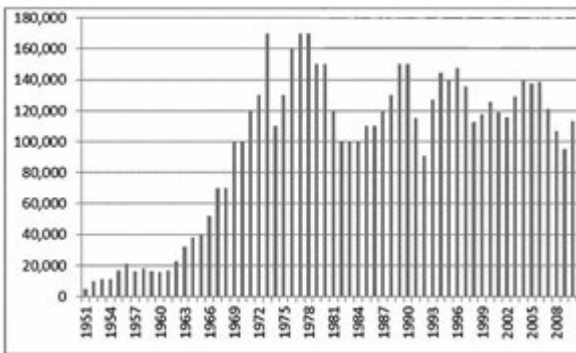
「新興住宅地」と「アパート」との間には「林」「自然」と称された境界がある。土屋佳彦は、この自然について「生活欲の旺盛さ」と「土地との結びつき」という二つの面があることを指摘しているが、少なくとも前者は、寿夫が病み上がりに近所を散歩する際などに、住宅の様子からも看取していることから、判断に若干の留保が必要だろう。視線は「アパート」側からのそれなので、「新興住宅地」は常に彼岸にあることになる。東京オリンピックからの景気向上は一九七〇年の日本万国博覧会に結びつけて語られることが多い。ドルショック（ニクソンショック）、田

中角榮内閣の「列島改造計画」以前のこの時代は、一時期よりは緩やかになってはいたが、いわゆる好景気の時期であつたと言つてよい。

昭和三〇（一九五五）年の日本住宅公団の設立。昭和四〇（一九六五）年の地方住宅供給公社法により、次々と地方公共団体による住宅供給公社の設置がなされる。勤労者や若い世代に向けて多くの団地（集団住宅）が建てられることとなり、そして多くの宅地が整備供給されるようになる。住宅着工統計が始まつた昭和二六（一九五一）年には四九七六戸だった一戸建の着工数は、一九六〇年代後半から急増し、一九七二年には一万七千戸に達した。ただ、この年に見られる急増はさきの「列島改造計画」の影響もあることを考えると、丁度テキスト発表時の頃までが第一期目のピークであつたと考えてよいだろう。

昭和四三（一九六八）年頃からは、鉄道沿線の開発が盛んになり、いわゆる大都市圏に対する郊外型住宅からの通勤圏が拡大してゆく。若い夫婦あるいは上京したての若い勤労者たちにとっては、都心部に近い集合住宅（団地）を選択し戸建ての資金を貯めようとするか、校外の新しい新興住宅地に安い一戸建を購入するかという選択肢が生まれ、やがて全国的な土地の価格高騰に伴い前者は後者という目標に対する第一次通過地点と見做されるようになってゆく。

時代性を鑑みれば、さきの引用における「自然」が「空地」として「安普



戸建分譲の着工の年推移

請の家」に浸食されてゆくという「予感」は、この時代おそらく確信に近いものだったに違いない。こう考えると、アパートと新興住宅地に横たわる「自然」とは、ある種の「境界」としての役割が大きいように思われるのだ。此岸は消えつつあるもの。そして、「老婆」は、彼岸（あちらがわ）からやってくる。

それから、片手で裾をからげ、もう片手で草を押し分け、すこし及び腰で出てくるのを見ると、老婆だった。皺くちやに老いさらばえた感じではなく、色白の小肥りですこぶる健康そうだが、足の運びのたどたどしさはやはり年寄りだった。

(173)

老婆は「白い姿」と「色白の小肥り」という特徴でとらえられているが、これは妻である礼子と同じ特徴を有している。年齢こそ離れたものとして描かれつつ、両者は容易に反転する関係がある。

なにか大事なものを汚されたような、自分で汚してしまったような気持で、彼は洪面をつくって老婆を見まもった。内股の歩みで近づいてくる老婆の、腰のあたりにまだなんとなく漂う女臭さが、彼の不快感を静かに掻き立てつづけた。

(173)

老婆に「女臭さ」を感じる感覚を「不快感」とともに語ってはいるが、寿夫は、「老婆」が近づいてくる様子を「自分から抱き寄せた感覚」とみなす。以後も、この老婆は「若々しい声」「上目づかい」「媚」などといった表象とともに語られるが、このテキストの語り手は、当初「寿夫」という男に内的焦点化しながら物語を綴ってゆくのだから、

こうした矛盾した感覚は、ひとまず寿夫自身から生じたものであると言える。

老婆と寿夫は、ヒロシという青年の話題を介して結びつけられる。ヒロシとは、アパートの隣に住む工務店で働く労働者たちの一人である。

この一週間、会社を休んで床についている間に、寿夫ははじめて隣家の若い男たちの暮しに耳を傾けるようになった。毎朝、アパートの夫婦たちがまだ床についている時刻におもてが騒がしくなり、畑のへりにつくられた共同の流し場で口をすすぐ音、東北なまりの大きな話し声、突拍子もなく始まる流行歌などが賑やかに入り乱れ、やがてガランガランと工具を小型トラックの荷台に放りこむ音がしたかと思うとエンジンがかかって、毎朝きまっ  
てヒューツという奇声とともに、男たちをのせた車が走り去る。

(175)

高度経済成長を支えた「集団就職」に象徴されるいわゆる「金の卵」と称される労働力は、中学卒業直後に上京してきた若者たちに担われていた。大企業のサラリーマンや公務員が高学歴の若者の就職口と化していく中で、町工場や商店等のいわゆるブルーカラーの職種は危機的な人手不足であった。一九六〇年代後半になると、池田内閣の国民所得倍增計画もある程度の成果を示し始めてはいたが、それでも上京する若者たちの高校の進学率はまだまだ低く、高校全入運動の象徴的スローガンとなった蜷川虎三の「十五の春は泣かせない」という言葉が逆説的に示している様に、若い低学歴労働者がいる風景は日常的なものであった。

テキストでも、労働者たちは、寿夫たちの様なアパートに住む大学出の「勤め人たち」と対比的な存在として描かれているが、特徴的なのは、朝は早朝から大騒ぎで出勤し夜は夕食時の騒ぎや大音量のテレビといったように、その

生活は「音」として捉えられる。

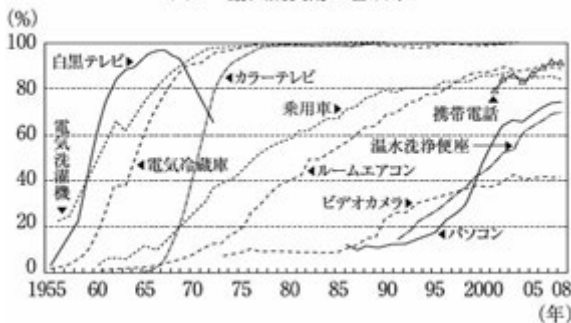
畑にそって荒っぽい話し声が遠ざかってゆき、新開地の夜の静かさの中に消えると、入れかわりにアパートの部屋部屋から、いままで隣の賑やかさに掻き消されていたテレビの音が聞えてくる。

労働者たちの家から聞こえてくる遠慮のないテレビの大音量は、物理的な騒音ではあるが、それは長く続くことはない。しかし、隣家の住人たちが町に繰り出してしまった後、アパートから聞こえてくるテレビの音は、音量こそ互いに気を遣ってはいるものの、その音声は彼らが寝るその時まで続き、まさに生活と密着した様な粘着さからくる悪印象を寿夫に感じさせる。

テレビ放送は昭和二八（一九五三）年に国営のNHKと民放の日本TVで始まり、TBS（一九五五年）、フジテレビ、日本教育テレビ（現TV朝日）（一九五九年）と続き、一九六四年のTV東京の放送開始により東京首都圏のテレビ放送が出揃ったことになる。以後、娯楽としてのテレビ放送は、ラジオ放送を凌ぐ人気となり、昭和四九（一九七四）年のオイルショックにより各テレビ局が深夜放送を自粛するまで、夕方から夜の主たる娯楽の対象となる。

一九六九年には、日本のテレビ受像機の生産台数が世界一位となる。だが、この頃の番組欄を見ると、相撲中継、野球中継、時代劇、子供向け番組、バラ

図3 耐久消費財の普及率



内閣府「消費動向調査」



エティなど家族で視聴することが主に意識されていたことが分かる。若い世代、特に独身の若者達に向けた番組はかなり少数であったのだ。<sup>⑩</sup>

テキストでも、こうしたテレビが生活の中に浸透しているのは、むしろアパートの住人に方である。大音量のテレビは、一時的にしか独身の労働者たちをひきつけることはなく、夕食後すぐに彼らは夜の町へ消えてゆく。だが、アパートの勤め人たちの家族は、隣家への騒音の被害を気にしながらも、その依存は深夜まで続くのだ。

この婆さんにしても彼にむかつて《あんたたち》と呼びかけておいて、その彼が目の前にいるのに、《今日は出なのかい》などとたずねるところを見ると、かならずしも彼を男たちの仲間に数え入れてはいないようだ。見えない男だし、職工らしくはないけれど、どうせどこかを飛び出してきた新入りだろう、とそれぐらいに思っているに違いない……。そんなことを考えているうちに、彼はふいに、見まちがえられていることに奇妙な喜びを覚えはじめた。

(177)

寿夫は、ヒロシたち労働者と混同されていることに「奇妙な喜び」を感じている。また、この老婆に気にかけるれているヒロシに「おかしい羨望」まで抱いている。この物語に出て来る人物たちは、他者にするべく対峙しながらも、どこかで同一化の欲望を持ち続けているふしがある。

年上の仲間たちからヒロシ、ヒロシと呼ばれている少年の顔を、寿夫は早くから見覚えていた。男たちの間に姿を見かけるようになったのは去年の春からである。言葉からするとあきらかに東北の出で、おそらく中学を出

てすぐにここに紹介されて来たのだろう。

(179)

実際、首都圏の労働者たちの出身地で最も多かったのは東北の若者達であった。一九七〇年当時、ヒロシの様な少年は日常だったのだ。

そんなヒロシと妻の礼子とを結びつけるのは「東北なまり」の言葉である。東京の大学を出ている礼子は、今でこそ言葉のなまりは影を潜めているが、ヒロシの言葉だけではなく、そのニュアンスの深い部分まで玲子には理解出来る。ヒロシと玲子の物語は後に展開されてゆくことになるが、その伏線であるかの様だ。

ほかでもない寿夫にむかつて話しかけている。寿夫は三十近くの妻帯者の皮肉な感慨を老婆に見て取られまいと顔を伏せた。はたから見れば、年寄りの説教の前で困惑して頭を垂れている若者の図である。

(184)

この場面は様々な意味で象徴的である。もちろん老婆は寿夫に「説教」しているのではない。だが、この二人の様子は、立場を代えて見れば、全く異なる様相に変化するということだ。また、若い男と年老いた女、と抽象化された二人の姿は、後に妻の視線からフレーミングされたものとして再帰的に語られる様に、テキスト全体において「若」「男」「老」「女」という要素が組み合わせを変えながら何度も再演されていく。さらに、このシーンは、見ている自らの姿を見るところという図式で語られているのだが、ここにも、主客という存在基盤は容易に反転するという問題系が示唆されている。

ここでの老婆の「説教」とは、「ほんとの楽しみ」を見出すことにより「魔物」のつけこむ隙を与えるなどというこ

とである。この「魔物」とは「悪い女」のことだ。

あんたが心がけさえ改めれば、いいお嫁さん、ちゃあんと世話してあげるわよ。心のきれいな娘さんがいっぱいわたしたちの集まりに来てるのよ。老いも若きもうちとけて、そりゃあ和やかなものよ。三日に一度、夕飯の後に集まって、円くなって……

(186)

この老婆の真の狙いは、新興宗教団体の勧誘にあるようだ。ここでも、労働者たちやヒロシの話題であったのに、いつのまにか「あんた」という二人称に代わっている。しかも、寿夫はその状況を否定することが出来ず、「完全に従順な気持」になってしまっている。

遠藤浩は、当時の宗教が果たした役割について、以下の様に述べている。<sup>(1)</sup>

だが、急激な都市化と小家族化のために、共同体は機能せず、いまだサービス業も発達していなかったから、簡単には解決しなかった。戦後の新宗教が、冠婚葬祭を通じて、若者たちを中心にして、都市部に深く浸透していくのは、宗教団体がこの問題を積極的に引き受けたからである。

テキスト当時の「新宗教」が、共同体を形成しえない若者たちの不安という問題に対し「積極的に引き受けた」のは、確かにそうだろう。団体によっては、それを「結婚」という形態によって示し「勧誘」していることもあった。だが、こうした「勧誘」手段は、戦後に復活あるいは誕生した「新宗教」とは、異なる新たな宗教として認識されて

いたようだ。

島田裕巳によると、新宗教や新興宗教という言葉は使われることがなかったわけではないが、戦前においては一般化はしなかった。<sup>(12)</sup>戦後の一九五〇年代から六〇年代にかけて、新しい宗教団体の活動が爆発的な拡大を始め、「新興宗教」という言葉が蔑視的ニュアンスを含んだ形で一般に広く使われるようになったという。

また、宗教社会学者の西山茂、宗教ジャーナリストの室生忠などは、当時台頭してきた幸福の科学や旧統一教会などに對して、「新新宗教」という言葉を提唱しているが、やはり定着には至っていない。いずれにせよ、一九七〇年頃、戦後増加あるいは復活してきた宗教とは別の枠組みとして捉える必要がある宗教団体が台頭し問題視されていたのだとは言えるだろう。また、これはサブカル分野などにおける後のオカルトブームなどにも繋がってゆく端緒でもあった。

「そう。あんたはすこし年くつてゐるんだね。でも同じことよ。そうかい……。今日はほかに用事があるから、また話しに来るわね」

(187)

たしかに、老婆の言動は理論的には、つじつまが合わない。だが、不思議な力によって、寿夫とヒロシという境遇も年齢も全く異なる人間を容易に反転可能な存在としてしまい、その状況を一時的にせよ、相手に内面化させてしまっているのだ。

## 2 礼子と老婆

明けはなたれた玄関口の扉から、生ぬるい風がダイニングキッチンを吹き抜けてきて、居間の萌黄色のカーテンを窓の外にむかつて満々とふくらましていた。吹き通しの中で礼子は暑がりの白い軀を畳の上にひらく横たえて、軽く立てた膝の下でワンピースの裾を風になぶらせている。

(187)

妻の礼子の身体も「白」と「肥」という特徴で捉えられる。ここでの「扉」「窓」「カーテン」等が外部との境界を示していることは理解しやすいが、繰り返される内側への「風」による「カーテン」のふくらみは、ワンピースを着用している礼子の表象と重なることが多く、両者の重なりは、部屋という空間が妻という外部を視る主体の内面として機能していることを語っているようだ。また、「カーテン」と「ワンピース」が重なることは、部屋という空間の中に居る人間が重なること、言い換えれば、人間の境界が部屋全体にまで拡張していることも示している。

副田賢二は、敗戦から高度経済成長期までの小説における「部屋」について、「閉じられた空間」として機能していた〈部屋〉が、七〇年代半ば以降には、その内部に「閉じられていない」領域が幾重にも湧き出すような「多岐的な物語の場」へと表象形態が変化していったという指摘をしている<sup>(1)</sup>。興味深い指摘だが、テクストの初出時とおおよそ五年の時間差は気になるところであり、むしろ、身体論の文脈で考えれば、これが特殊な現象ではないことに注目しておきたい。

たとえば、身体や服に接触するだけで嫌悪感を感じるような虫ならば、自分の部屋の何処かに居るといふ嫌悪感は同質かそれ以上だろう。どんな空間にもその虫が存在している可能性があるのだとしたら、この感覚は論理的ではない。しかし、それは、プライベート空間が身体感覚の延長されたものであることを示している。

このテキストは、こうした身体と空間の関係を相互浸食的な現象としてとらえているのだ。

「勧誘か。俺はね、会社で組合の分裂騒ぎがあつてから、勧誘だとか説得だとかいう言葉にアレルギーになつて  
るんだ。人を人とも思わないっていう言葉だよ」

(188)

歴史的に見れば、高度経済成長期の労使関係は、安定した雇用関係を生み出し経済成長を担った一支柱であつたと評価される。終身雇用、年功賃金、企業別労働組合等、日本型企業の特徴と目されるこれらを達成した主要因として高い評価を得てきた。

戎野淑子の分析によれば、企業間競争による厳しい雇用環境で様々な労働問題が噴出しており、一九六九年から七二年にかけて争議件数は二度目のピークに達している<sup>(19)</sup>。だが、ここでの労働運動は、企業内での環境改善をめぐるそれで、賃金や待遇改善の根拠あるいはその要求をのむだけの余力が企業側に備わつてきたという背景がある。

「勧誘」という言葉に対する拒絶反応には、六〇年代初頭の敵が明瞭であつた安保時代の労働運動と異なり、被雇用者間における利害対立により、より複雑化した運動の荒波に飲み込まれていた寿夫の姿が浮かぶ。寿夫は、仕事に倒れた時の様子を以下の様に振り返っている。

彼らはすぐには手を出さずに、落伍者を憐れみいたわる目つきで、彼にむかつてしきりにうなずいていた。《そ  
うだよ。あんたは疲れ過ぎたよ。限界だよ。休養の時期だよ……》分裂騒ぎの真最中には互いに目を吊り上げて  
いがみあい、両側から彼をこづきまわしあつた連中がうち揃つて、ほとんど和氣藹々と、床に坐りこんで立ち上

がれない彼を見まもっている。やがて彼らは被保護者となった彼を賑やかに医療室に担ぎこんだ。

(193)

皮肉なことに「分裂」騒ぎでいがみ合っていた同僚たちは、寿夫が倒れたことによって「連帯」してしまった。ここで、彼らを結びつけているのは、「保護者」としての立場であり、「被保護者」とはすなわち「脱落者」としての烙印である。

もちろん、これは寿夫が勝手に認識している意識に過ぎない。しかし、こうした感覚を有する程度には、戦後のサラリーマンの「企業戦士」意識は、寿夫の裡に内面化していたのだ。

古井も「内向の世代」と称される作家である。このテキストも、労働運動と病気により公的空間（労働空間）から「拒絶」された寿夫が私的空間（夫婦）に閉じ込められる話であると読むことは可能だ。しかしながら、それは、このテキストにおける社会性や歴史性の存在を否定するものではない。むしろ、ここに刻まれている歴史性こそが、断片的な物語を相互に結びつけある一つの有機的空間を形成しているのだ。

### 3 「夫婦」のゲシュタルト — 「つま」をめぐる物語

とくに気にさわった様子もない。礼子は呆れ顔で窓の外に目をやり、さっき彼が老婆の前でうなだれていたあたりを、《やってるわね》と言わんばかりにしげしげと眺めて一人で笑っていた。女が女の振舞いを眺めやる時の目つきである。

(189)

さきの寿夫と老婆のやりとりを礼子は窓から見つめていた。ここから、二人はこの老婆の「感触」をすり合わせるように会話してゆく。

彼はふと礼子が老婆のことをとうによく知っているような気がしてたずねた。

「何者だい、あの婆さん」

「そんな事、あたしが知るわけないでしょう」

憤然として礼子は彼の問いを撥ね付けた。潔癖そうな目が、不愉快なものを振り落そうとするように、部屋しゅうをいらいらと見まわした。

(189)

このやりとりは、「知っている」の内実によって解釈が変化する。礼子がこの老婆を「とうに」知っていることは確かだが、「よく知っている」かどうかは別問題なので、厳密に言えば、礼子は何の嘘もついてはいない。だが、一方で玲子は老婆との関係を否定し拒絶しながらも、老婆についての話は続けるのである。老婆をめぐる、寿夫にも礼子にもよく似たパラドックス性が内包されている。

「何はともあれ、集会に出て来いって言うことらしいな。集会に出て来れば、若い娘がたくさんいて、知り合いになれるって寸法だ。うん、考えてみれば、ずいぶん露骨な勧誘だな」

「男の人たちが、露骨なのよ」

(189)



「包み込」もうとする老婆と「拒絶」しようとする礼子は、その目的こそ正反対であるが、男を画一的にとらえ断言してしまう礼子の発言を「女の戦術」と捉える寿夫には、そこに老婆との同一性が見出されてしまう。寿夫は、自らの老婆や礼子を見つめる視線から両者を重ねるだけでなく、自分を見つめる老婆や礼子の視線の先を想像しながら、やはり両者を重ね合わせているのだ。

お蔭で、月曜に熱に浮かされて家に戻って来てから、さつき老婆に話しかけられるまでのおよそ一週間、彼は妻以外の誰とも口をきかずに過すことになった。

(192)

二人は五年前に学生同士で一年間同棲しており、以後そのまま生活を続けている。同棲時を「濃厚な」「汗の臭いに満ちた」一年間と称するのは、セクシャルなそれを意味しながらも、同時に同棲の一年間と病床の一週間は、重なって捉えられる。両者を結びつけるのは、「汗」と「無為」そして「隠」である。

家に帰るまでの時間は、混濁したそれとして想起される。寿夫には、自力で家まで帰宅しそのまま倒れ込んだ記憶もあるが、そこには、移動するアスファルトのイメージが象徴する、車で運ばれている記憶が混在している。

辿りついた場所が家ではなく、別の場所に運び込まれて後に妻が駆けつけたという記憶。さらに、運ばれもしないで会社の医務室で睡り続けていた記憶、全く見も知らぬ部屋での記憶など、これらは「睡り」の間に繰り返し喚起され、記憶の確実性を揺るがしている。

そんな事が一晩じゅう繰返された。ときには彼ははいくつもの場所に同時にいるような気がした。すると彼はも

うどこかにいるという確な感じの支えをはずされて、途方もないひろがりの中に軀ごと放り出され、自分のコマカミの動悸を、ただひとつの頼りとして、心細い気持で聞いていた。

(196)

人間は、常に自己（内部）から非自己（外部）、あるいはその逆を繰り返しながら、自らのアイデンティティを確認し続けている。自分の身体や身につけているものなど、両者に跨がる曖昧な領域を抱えながらも、絶えず変化する他者や外界に対して、自己の領域を更新し続けなければいけない。

さらに、人間は自らの変化しつつある外見や精神を認めつつ、自己の同一性を見出さなくてはならない存在でもある。形而上哲学の議論の中で、記憶の継続性が議論の俎上に上がる所以でもある。だが、自己の記憶をめぐる混乱は、こうした自己の根拠の弱さを露呈させ、自らの存在基盤の弱さを召喚してしまう。寿夫は一晚中、自らの存在基盤と向き合わなくてはならなかったのだ。

彼は礼子と二人で、むかし棲んでいた古ぼけたアパートにるように思った。旅先の宿に夜遅く着いて、女中部屋のようなところに押しこまれて朝を迎えたようにも思った。しかしそれはすでに分裂した場所の意識ではなくて、ひとつの場所の感情だった。夢うつつの中で、彼はようやく自分の居場所に落着いて安堵した。

(197)

翌朝、寿夫は「自分の居場所を取り戻して」いたが、事態は決して戻ったのではなく、進み始めていたのだ。昔のアパートとさして変わらない空間に、同じ相手と暮らしている現状。「寸分の遊びもない四角四面な住まい」に閉じ込められていたのは、もはや主婦である礼子だけではない。

閉じ込められた夫婦は、夫婦のアイデンティティをそれまでの時空から構築するしかなく、それぞれのアイデンティティを相手との関係から見出すしかない。だが、この閉じられた関係に対して、他者は次第にその領域を侵犯してく。

昼食を終えて居間の吹き抜けの中にまだ寝そべっていると、礼子が盆の上に桃を三つと、それに皿とナイフとアルミのボールをのせてやって来て、彼の枕もとに坐りこんだ。熱が引いたあと、最初に寿夫の喉を通ったのが、この桃だった。高熱に炙られて過敏になった口の粘膜をなだめるようにして、円く熟れた甘酸さが喉の奥へ流れこんでいった。

(198)

桃がセクシャルな象徴を帯びた語であることは言うまでもないが、桃は、寿夫と礼子のみならず、ヒロシと礼子をも結びつけている。そして、老婆であろうが礼子であろうが、人が人を何かしらの意図で取り込もうとする時、繰り返し「淫靡」という言葉が繰り返されていることにも注目すべきであろう。寿夫自身の描写にもこの語が使われていることから、このテキストにおいて「淫靡」とは、性的な意味を含みながらも、かなり拡張されている。人同士だけでなく、本来は別の時間、場所、あらゆるものが他のものに重なるうとする時、きまってこの語は現れるのだ。

もちろん病気で休んでいる間でも勤め先からは給料が出ているわけであり、その意味では彼のほうが妻を養っていることには変りがなかったが、しかしほかの食べ物をよく受けつけないで、妻のむいた桃を貧るように食べていると、《養われる》という言葉はもつと直接的な意味を帯びはじめ。

(199)

「桃」は、寿夫と礼子の「養う」という関係を逆転する。家という空間に「隠め」られた寿夫は、外部の礼子を持た「聞き」そして「見る」ことしか出来ない。

とくにこの一週間、ひねもす寢床でまどろみ過しては、ときおり目を覚まして部屋の中を飽きもせずに見まわしている、しばしば彼は見なれたはずの妻の姿に、しげしげと目を注いでいる自分に気づくことがあった。(220)

寿夫は外で働きに出ているわけだから、日々日中を礼子がどう過ごしているかなど想像の範疇にもなかったのだろう。すこしづつものをずらしながらひたすら戸棚の奥を透かし見る礼子。御用聞きとの対応にも身だしなみを整え、きちんと応対しようとする礼子……。

その醒めた目は日々に繰返されることを、情性からではなくて日々にあらためて確めているようだった。やがて礼子は肌着を藏めおえると、正坐の姿勢のまま筆筒のほうへすこしいざり寄り、抽斗の中をもう一度端から端まで目をとおして、それからピシリと中に押しこんだ。(202)

そこにあるのは、繰り返しなされる「仕事」に淡々と向き合う礼子の姿であり、外で日々働く男の目には全く異質な行動であったが、その姿は寿夫の視線を釘付けにしていた。だが、それは魅了されたからではない。

あの時、彼は妻のそばに寝そべっているが、窓の外から他人の家庭の気配をそつとうかがう独り者の男の氣持になっていた。どの窓の内にも一人ずつ女がこもっていて、こうして日常の事どもを真剣な目で見つめながら、もともと男よりも濃密な存在をさらに濃密に煮つめていく。ほとんど無制限に煮つめていく。その思いに彼はしばらく圧倒されていたものだった。

(203)

日々目にする「家刀自」の礼子の姿は、寿夫の理解の範疇から逸脱したものであった。寿夫の礼子をみつめる視線は、徹底した他者への視線、あるいは他者という認識を深めてゆく視線である。

いま物に向けられているあの視線が、そのままの強さですうつとこちらを向き、物蔭に潜むようにして傍からうかがっている彼の視線と一直線につながった……。夫婦が日々に顔を合わせ、目を見かわしているということが、彼には急に理解できなくなった。

(203)

日々視線が交わされていると思った相手の視線の意味が理解出来ない。この事態は寿夫を大いに困惑させたに違いない。妻を籠めていた主体であるはずのものが、その客体とともに長い時空を共有すればするほど、妻の他者性が否応なしに高まってくるのだから。

#### 4 礼子とトシオ — 「桃」をめぐる物語

「桃」は、寿夫と礼子の間に視線の物語を生み出すだけではなく、トシオと礼子の間にも全く違う物語を生み出す

ことになる。<sup>(16)</sup>

「いえ、同じ桃よ。ヒロシ君がもってきてくれたの」

口の中で桃の味が急に変わったような気がした。あの少年からもらった桃で、病み上がりの心身の甘えを養われていたとは、思いもよらぬことだった。濃いサングラスの蔭から、困惑した目が、男の淫らさを眺めている。

(204)

ここで思い出されるヒロシの視線の先にあるのは、己の「淫らさ」である。

礼子は窓の外にむかつて笑った。奥深いところを、何も知りもしない人間にちよつと触れられた時の笑いだった。小学生の頃、クラスの女の子たちの前で、聞き覚えたばかりの卑狼な言葉を口にする、彼女たちはふいに大人びた顔つきになって、そんな笑いを浮べたものだ。同郷人であるという事には、あの事と同じように、内密なものがあるらしい。

(205)

ここで礼子に見出される「笑い」も、寿夫の「淫らさ」も同質なものとみてよいだろう。こうした夫婦間の「淫靡に「桃」を介してヒロシが参入してきたのである。

ヒロシが礼子に始めて話しかけてきた時の様子を礼子は以下の様に回想する。

「買物籠さげて畑ぞいの道を入ってきたら、あの子が畑のへりに一人で立って、変な顔してこっちを見てるのよ。睨みかえしてやっても、ドギマギはするんだけど、目を離さないのよ。正直いって、この子ったら……って思ったわ。すれ違って、階段を上がって、ドアの前で振り向いたら、まだ見ている。顔をぬうつと突き出して、困りきったような顔して見上げてるじゃないの」

その視線がまだ首すじにまつわりついているみたいに、礼子は眉を顰めて肩を強くよじった。それから、急に暗い声になった。

(206)

老婆が寿夫をそうした様に、ヒロシが礼子を捉えたのも視線の拘束であった。もちろん、礼子の場合、寿夫がそう感じたような「淫靡」な印象をともなっていたのかは分からない。礼子は、同郷の人間の視線から、当初身内の不幸の様な不吉な予感を感じていた。

そう低く押し出すようにつぶやくと、礼子はヒロシの話を忘れてしまったらしく、部屋の中で寝ている夫を見つけた時の話をまた始めた。これで何度目だろうか、話すたびに彼女は興奮で目を潤ませて、おかしいことに、彼を詰る口調になる。そして言葉の抑揚にお里訛りが透けてきて、隣の若い者たちの喋る調子とすこしばかり似通ってくる。

(206)

ここで、礼子の口調が詰るようなそれになってしまうことや、隣の若い者たちの喋る感じに似てくるのは、それらが他者を「籠め」ようにする行為だからである。寿夫の急病は、結果的にこめられた妻という位置を逆転させた。専

業主婦であつたはずの礼子が、寿夫を部屋に籠める主体に躍り出たのだ。礼子の口調に興奮の色が見られるのも、ここに原因があるのだらう。

このテキストのタイトルは「妻隠」であるが、テキスト内で唯一この語が現れる時は「つま隠」と表記される。「つま」とは元来、異性の相手をさす言葉なので、特に「妻」という意味に限定されはなかった。

専業主婦を中心とする近代の家族制度は、「つま隠」の「つま」を実質的には「妻」に限定し、「妻」を社会から「隠す」（隔離し閉じ込める）制度として機能していた。それは、経済的庇護の元におくことを意味しながらも、同時に妻を性的な意味で社会から「隔離」しているわけでもある。だが、多くの場合、隠す主体である男性はそのことに気がつかず、また隠される客体である女性でさえも、「隠」されてからその事実気がつくことだって少なくない。

礼子とはつさに彼の顔を見分けられなかった。しばらくの間とはいえこの家の中に、それも彼の寢床の中に、見も知らぬ男がうずくまっていた。なるほど夫婦という現実などはちよつと揺られると、案外頼りないものだ。それにしても、いったん夫の姿をそんな風に見つめてしまったからには、これからも事あるごとに、夫の姿の中に見もしらぬ男を見るようになりかねない……。

(210)

夫がとらえる妻、妻がとらえる夫、そして夫婦……。こうした主客の転換あるいは抗争は、それまで自明であつた関係性を簡単に突き崩してしまう。平日の昼間、居ないはずの人間が目の前に寝ている。それも自分たちの部屋で。この程度の変化で、礼子は自らの夫を知らない男と感じ、最も見知っているはずの夫の顔が同定できなくなってしまうのである。



## 5 礼子と老婆 ―「不実」をめぐる物語

ここまで話して突然、礼子はこれまでの発言を自ら翻すように、老婆を見知っている事実を語り始める。

「知ってて言ってるはずなのよ、あのお婆さん。あなたがあたしの亭主だという事を」

「だって、婆さん、礼子の顔は知らないのだろう」

「覚えてる、と思うのだけど」

礼子は言いたそうな、隠したそうな、曖昧な顔つきになった。彼はふと嫉妬に似た感情に駆られて問いつめる口調になった。

(215)

なぜ、ここで礼子は突然この話を告白し始めたのかは分からない。だが、老婆により礼子と寿夫は相同性をもたられされており、今この夫婦を重ねているのは「勧誘」されたという事実である。

「ええ、だけどその後が厭らしいのよ。自分がむかし亭主に急に死なれて、身の置きどころがなくなつて苦労した話を、ながながと始めるのよ。しみりした調子で。ああいう人って、露骨ねえ」

(216)

自らを死人のように扱われ、「勧誘」のダシにされたことよりも、ヒロシだけではなく老婆も寿夫が病気で倒れた事実を知っており、それを礼子と共有していたことの方に寿夫は驚きを感じている。寿夫の病気をめぐって、礼子と

ヒロシと老婆はその状況を目撃しており、その意味で「客観的」に語ることが出来るのは彼女たちだけなのである。寿夫本人だけが幻影の中、その事実を思い出せないでいる。

「そうね。あなた、病氣してから、なんだかヒロシ君みたいに若くて、気ままで、危っかしい感じになったわ。さっき、あなたがあの人に何か言われているのをここから見たとき、なに言われてるか、ピーンと来たわ」 (217)

これまで、寿夫は、主として視覚的な特徴において、老婆と礼子を重ね合わせて来たが、ここでは病氣をきっかけに、礼子によって、寿夫とヒロシが重ね合わされている。

「さてはお前も再婚の話をされたな」

目つぶしのつもりで言ったのに、礼子は具合悪そうに下を向いて笑った。

「あたしの事としてではないのよ。ただ、夫に先立たれて望みを失った人が、集会に来るようになってからまた生甲斐を取り戻して、そのうちに仲間の一人と幸福になったとか、そんな話を……」 (217)

ここでは老婆の「勧誘」によって礼子と寿夫自身が重ね合わされる。しかし、それ以上に重要なのは、既にパートナーがいる二人それぞれに、老婆は、別の「夫婦」という可能性を示唆していることである。

二人は顔を見合わせた。どちらかがもうひと押し問いつめれば、お互いに心の内で犯したささやかな不実を、

ささやかで案外に深い不実を、責めあうよりほかにないところまで来ていた。

(218)

老婆との会話の内容を話すこと自体には、お互い問題はない。しかし、そのやりとりで寿夫と礼子は何かを感じ取った。それは「におい」という表象がよく示している様に容易に形に出来るものではない。しかし、それは夫婦の間に確実に存在し、同時に決して形にして（交わして）はならないものであった。

そこで二人はともかくにも十年間、少年少女に近い年頃から青春の出口のところまで別れずに来た男女の平衡感覚で立ち止まった。そして二人して老婆の姿を思い浮べた。

(218)

それは「心の内」の「ささやかな不実」である。おそらく誰にでもあり得るものであろうし、当人にだって自然に忘れ去られていく様なものかもしれない。だが、老婆がもしこの「不実」を独特の嗅覚で捉えているのならば、老婆の言動には確かに「淫靡」と呼べる面が存在するといつてよい。

「もしかすると、あの人、あなたがあたしの夫で、あたしがあなたの妻だということ、よくは見分けがついてないのじゃないかしら。さきおととい畑のへりに立って風に吹かれていたという人だって、どこの男の人のことかわかりやしないわ。あの人のお話を聞いていると、なんとなく、自分がどこの誰って感じが薄くなってきたやしない」

(219)

ヒロシ、寿夫、礼子。それぞれが、老婆によつて、その輪郭を危ういものに感じさせられる。輪郭を失つた個は容易に他と反転する。これは、「杳子」以来、古井が拘つてきた重要なテーマでもある。

「――婆さん、いったい何を嘆ぎ当てたのだろう。」寝ている妻の横で寿夫はひたすら考えた。そこである「におい」の記憶に辿り着く。

その時、吹き抜ける風の中に、彼はもう長いこと忘れていたにおいを嘆ぎ取つたように思った。惰性になつた接吻のにおい、軀の隅々まで細かく染みわたつた汗と疲れのにおい。男女の隠っているにおいはらんで、カーテンが窓の外にむかつて苦しそうにふくらむように見えた。

(221)

寿夫と礼子は学生時代に同棲している。その際の「におい」とは、物理的には、生活の「汗と疲れ」のそれである。それを寿夫は「男女の隠っているにおい」として再認識している。それは、子供のいる家庭にも存在する「におい」である。子供のいる家族であろうが同棲であろうがそういった関係の向こう側には、多くの場合「性」が内包されている。だからこそ、寿夫はそこに「淫靡」を感じ取るのだ。

だが、同じ「淫靡」を感じ取りながらも、自分たちの生活を「同棲のにおい」であると峻別する。そこにある違いとは一体何なのか。

しかし誰にも頼らずに一緒になつた男女は、子供でもなければ、離れるのにも誰の邪魔も入らない。すべてが二人だけにゆだねられている。単純に惚れ合った男女なら、それに気づいてハツとしたら、もうおしまいだ。(224)

もちろん、これは上京した者同士の子供もいない若い夫婦の脆弱さを指摘しているだけではない。「夫婦」というシステム自体の脆弱さを問うているのである。同棲にせよ家族にせよ、多くの場合、その基盤の一つに「性」がある。だが「性」の存在は「愛」によって覆われ、時には隠蔽される。「性」が夫婦の紐帯であるという言い方は、にわか  
に受け入れ難いが、一方で「家族」や「愛」が何であるかという問いは、明確な答えが得られる問いではない。

——婆さん、このにおいを嗅ぎつけやがったかな。

そう考えると、二人にたいする老婆の言動も、辻褄が合わないでもない。このにおいは、はたの人間の鼻で嗅  
げば、いつ切れるかわからない男女の関係のにおいだ。

(223)

もちろん、老婆が嗅ぎつけたものが本当は何であつたのかは不明であるのだが……。

## 6 礼子とヒロシ — 「虚実」をめぐる物語

汗まみれになって目をさますと、窓の外ではもう日の傾いた気配だった。狭く暗い部屋の中で、繰り返し描写され  
る礼子の「軀をまるめて」眠る姿は、母胎の比喻を彷彿させる。

昔のつま隠の男女なら終日閉ざしていた戸を明けて縁に出て、爽やかに暮れていく空を眺めあい、夕風の渡る野  
を歩いて、また夜の来るのを待つというところだろうが、妻の礼子はこの一週間の疲れのせい、それとも気の

抜けてしまったせいか、夕飯の支度にかかる時刻も忘れて眠りこげている。

(228)

寿夫は、いつまでも寝ている妻を部屋において、散歩に出かける。そこで、寿夫が同棲を始めた頃のことを回想しているのは、夫婦ともに何かを再確認するように原初的な位置に戻りつつあることを示しているようにも見える。しかし、寿夫の目に入る周囲の家や生活から感じられるものは、自分たち夫婦の生活には「なにか伸び広がろうとする、旺盛に繁茂しようとする力のようなものが欠けているのではないか」というマイナス的な現状認識である。寿夫は、何度と同じ境地に戻ってくる。

散歩の帰り道、寿夫は偶然ヒロシと出会う。

「お午頃、どこかのお婆さんがたずねてきて、今夜の集まりに出てくれるように言づけていましたよ」

いんぎんな口調で寿夫は言づけを伝えた。それから、

「この前は、病院まで定っていつてもらって……」と言いかけて、相手との親密さの距離が取れなくなつて、意外にもしどろもどろになった。とたんにヒロシはスポーツ刈りの頭をぼりぼりと掻き出し、身の置きどころもない困惑の表情から、だしぬけに相談をもちかける口調で言った。

「あのお婆さん……、困っちゃってんだよ、俺」

(233)

寿夫とヒロシは、礼子あるいは老婆によって重ね合わせられはしたが、結局二人の「距離」が埋まることはなかった。二人は別々の方向に戻ってゆく。

「おい、何してるんだ。電気もつけないで」と彼は前に立って上から声をかけた。

「ああ、いい気持だった。軀がとろけてしまいそう」と礼子はまだ睡気に重くつつまれた声でつぶやいた。(234)

ようやく起きてきた礼子とともに、いつものヒロシたちの騒音を聞いているうちに、寿夫は以前礼子から聞いた話を思い出す。離れの修繕が何かをしている大工たちが恐ろしくて一人で踞っていたという記憶である。

あの時、彼が生半可な知識から、「そいつは性感の最初の萌しだよ」と言ったら、礼子は「そうかしら」とあどけない顔でぼんやり笑った。

いまでも彼女は円熟しかかった女のしるしを胸にも腰にもあらわしながら、眠りから覚めたばかりの子供みたいな顔を暗がりにぼんやり浮べている。(236)

何度も過去の痕跡をたどりながらも寿夫は元の位置に戻ってくる。だが、この夕方の礼子の睡りは、同じ場所に戻っては来ない。寿夫の言う「性感の最初の萌し」は、眼前で再帰されている。だが、礼子の性は異なるものとして生まれ変わっている。

それから彼女はちよつと何かを思い出したというふうに遠い目つきになって台所へ出て行った。また桃でもむいて来るのかと思っていると、彼女は台所で何やらがさごそとやり出して、いつまでも戻って来なかった。(237)

明日からの一週間を迎えるような、いつもの夕餉の風景の中、少しずつ何かがずれてゆく。「桃」を冷蔵庫に移そうとした礼子は、戸棚の奥が気になって仕方がない。その意を解そうとしない寿夫は、礼子によって風呂に追いやられる。その時寿夫に去来したのは、初めてこのアパートの風呂を見た時の印象だ。

それにひきかえこの風呂場には、『バストイレつき』のバスのように清潔で合理的で、その分だけ淫らなものがある、と彼はあのとこ思ったものだった。そしてそんな淫らさを、日常生活の内側にもつということに、いくらか興味をそそられた。

(241)

「淫ら」とは「淫靡」と同様、寿夫や礼子にとって、夫婦というシステムの通底音の様に響き続けた言葉だ。風呂に入った寿夫は、さっき礼子がつっていたのと同じ格好（胎児の姿勢）をしながら、身体感覚を溶解させ、周囲の音だけを聞く主体となつていった。

それらの音の中にもすれば紛れかける礼子の気配に、彼はすぐ近くにいながら、まるで遠い人間について気がかりな想像をめぐらすみたい、湯の中でじつと膝を抱えて耳を澄ましていた。そして段々に自分のその姿を淫らなものに感じはじめた。いつのまにか彼は湯の音を立てまい、自分のここにいる気配を外に洩らすまい、妻にも聞かれまいと、身動きひとつするにもひっそりと気を配っていた。

(242)



寿夫は、ここで象徴的には母胎回歸したように見える。だが、はたして彼は生まれ変わったのだろうか。少なくとも、風呂から出て寝室に戻った寿夫の時空感覚は、相互に溶解していくようになる。

居間の電燈は消えていて、暗がりの中に二組の蒲団がきちんと敷かれている。その中に男たちの狼歌が重くこもっていた。狭い台所で礼子と話をしているうちに、彼の感覚もおのずと内に閉ざされて、外へひろがり出ていく力を失ってしまったのか、とつさに彼はその声の出どころをつかみかねた。主のいない寝室に、大勢の声だけが濃くこもっていた。

(243)

ヒロシたちの会話は、礼子との不義密通を思わせる内容である。しかし、この声は果たして本物なのだろうか。寿夫には既に内部／外部、現実／非現実の感覚が溶解している。

それから後はヒロシの独壇場となった。ほかの男たちはいつもながらのヒロシの芝居がかった激昂に鼻白んでしまったらしく、もう逆わずにしかつめらしい相槌を打っていた。それでもやはりヒロシのことが心配なのか、あちこち歩きまわっては怒鳴りつづけるヒロシの後から、皮肉でもあるような、卑屈でもあるような相槌がぞろぞろと従っていく。しばらくしてヒロシの長い長い詠嘆が男たちの声をつつみこんで、畑にそって遠ざかって行った。そして遠くで泣き声のようになって、ふっと静かさの中に呑みこまれた。

(249)

その時間こえてきた「ヒロシ君。起きてる、ヒロシ君」と低く呼ぶ声、その後、ゴミを捨てに外出した礼子と男た

ちとの会話は、果たして幻聴なのか。テキストは既に夢と現の間をさまよい、出来事の事実性を確認出来ない。テキストの中で徐々に進んでいた主体の転換、溶解は、ここに至って時空の境界をも曖昧にしている。

たるんだ喉を顫わせているみたいな不愉快な声が、繰返されるうちに段々にふくらみを帯びて、年齢の境いを超えてやさしく、女らしくなっていく。いましがたの礼子の声がまだ窓の外の暗闇の中に漂って御しているような、そんな幻覚に寿夫は当の礼子を片腕に抱きながらふっと引きこまれかけた。しばらくして、そっと表へ出て行く足音があった。

(255)

妻は一線を越えてしまったのか。妻の「淫靡」は、夫婦という桎梏から抜け出し、何物かを取り込もうとしているのか。にもかかわらず目の前にある妻の身体。「誘惑」する声に呼応し出て行こうとする足音。分離した聴覚や視覚とは、何が分離してしまったのか。ここで分離しているのは、客体なのか、それとも主体なのか。「夫婦」の溶解は、そこにあった主体もそして客体も溶解させてゆく。そして、もはやそれは特別なことではない……。

## 註

- (1) 所収は『香子 隠妻』（一九七一年一月、河出書房新社）。引用は、新潮文庫（昭和五四（一九七九）年二月、新潮社）を使用、引用部末尾の括弧は頁数を示している。
- (2) 古井由吉、古屋健三「香子・妻隠」を語る『三田文学』58巻8号 一九七一年八月。
- (3) 大谷慎一郎「平衡感覚」と「細胞液」の帰趨——古井由吉「妻隠」論『出典』二〇二二（平成二四）年八月。

- (4) 奥野健男「文芸時評」『サンケイ』夕刊 一九七〇（昭和四五）年一〇月三一日。
- (5) 和田勉「古井由吉論 ―〈空間〉へのこだわりと〈音声〉の重層性をめぐって」『九州産業大学国際文化学部紀要』六卷 一九九六（平成八）年七月。
- (6) 森川達也「カタルシスの有無」『河北新報』一九七〇（昭和四五）年一〇月二五日
- (7) 土屋佳彦「古井由吉『妻隠』論」『文学と教育（文学と教育の会）』三〇集 一九九五（平成七）年。
- (8) HP「戸建住宅の歴史」(<http://www.shinchikuikodare.jp/>)より転用。
- (9) 遠藤浩は「スサノオと反近代の造型―芥川・折口・古井」（『明治大学日本文学』二四卷、一九九六（平成八）年六月）において、集団就職時の若者の都市流の問題を指摘している。
- (10) 長谷正人「序章 七〇年代テレビと自作自演」（『テレビだヨ！ 全員集合 ―自作自演の1970年代』二〇〇七（平成一九）年 一一月 青弓社）。
- (11) 出典は、註（9）の遠藤論と同じ。
- (12) 島田裕巳『戦後日本の宗教史』二〇〇五（平成一七）年 筑摩書房。
- (13) 「新新宗教」の概念に関しては、柳川啓一の編集による『国際宗教ニュース』（16巻3・4号合併号 一九七八（昭和五三）年四月、国際宗教研究所）が特集を組んだり、西山茂「新宗教の現況」（『歴史公論』5巻7号、一九七九（昭和五四）年五月）で論じられたりしていたが、一般的な定着には至らなかった。
- (14) 副田賢二「象徴空間としての〈部屋〉と高度成長―その物語機能の変容と「闇」の表象を中心に」『近代合同研究会論集』八号 平成二三（二〇一一）年三月。
- (15) 「高度経済成長期における労使関係」『日本労働研究雑誌』634号 二〇一三（平成二五）年五月。
- (16) 和田勉「古井由吉「妻隠」論」『福岡女子短大紀要』四二巻 一九九一年。